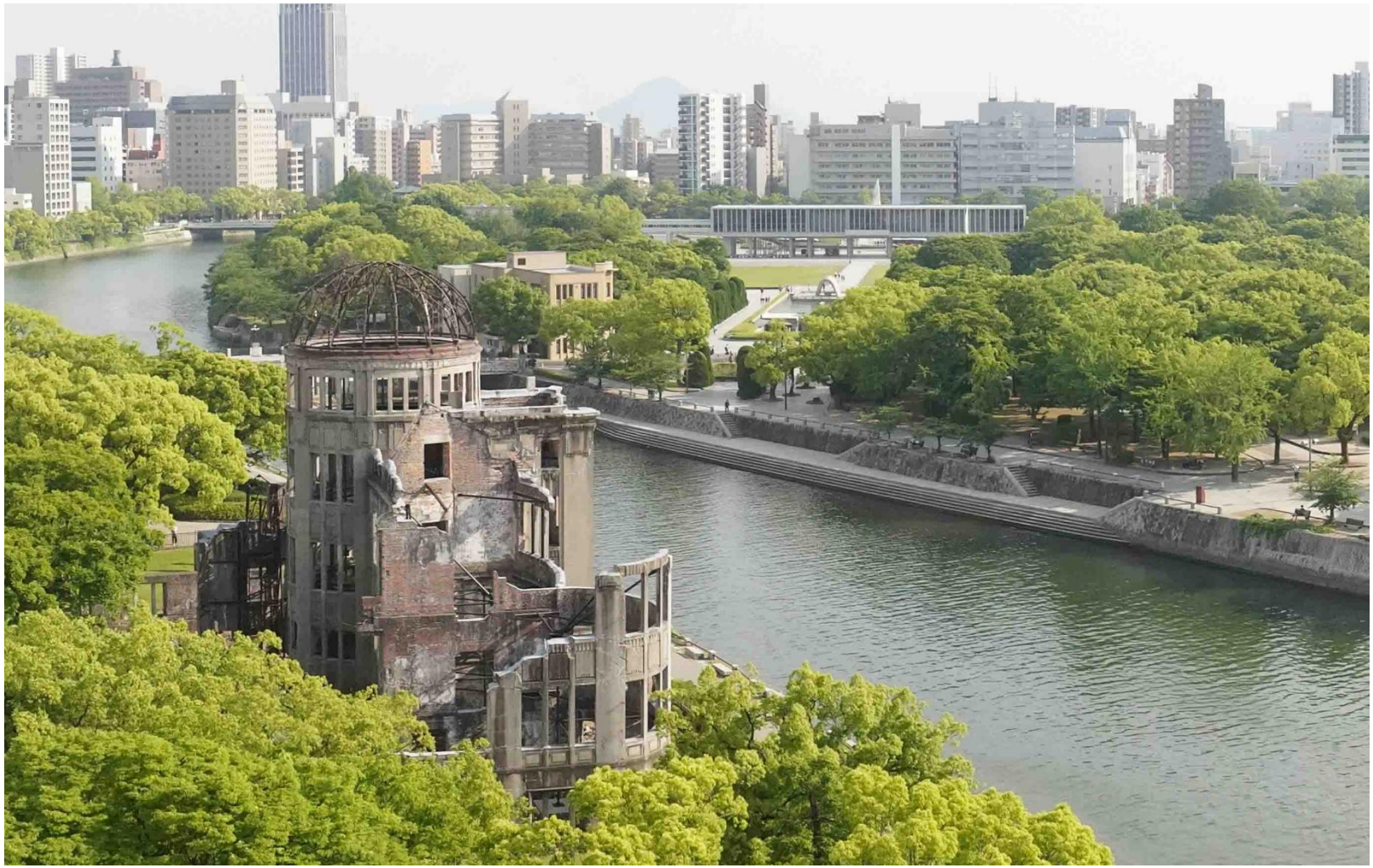
第６章　平和記念都市への歩み



6-01　2022 年の原爆ドームと平和記念公園

平和記念都市への歩み

原爆による未曾有の惨禍にみまわれた広島市は、戦後の早い時期から「平和記念都市」として復興することを目指しました。

原爆の爪跡が深く残る 1946（昭和 21）年、「復興第一年号」と表紙に入れた「市勢要覧」は、「広島は世界の平和記念都市である。市の復興は、世界平和を象徴するに足る理想的な文化都市を建設することを目標としなければならない」と高遠な理想を掲げました。

1946 年 8 月 5 日、広島市町会連盟主催の「平和復興市民大会」が行われ、1947 年 8 月 6 日に第 1 回平和祭（現在の平和記念式典）が始まります。この年 4 月初めて選挙で選ばれた浜井信三市長は、平和宣言で「真実の平和の確立」と「戦争の放棄」を呼びかけました。

原爆の惨禍を伝えるため 1949 年、壊滅直後から収集されていたガラスや磁器の溶解塊片、瓦などを展示する「原爆参考資料陳列室」が市中央公民館に設けられ、1955 年には、広島平和記念資料館が平和記念公園に完成します。被爆の実物資料や記録写真の展示が本格的に始まりました。

1955 年、第 1 回原水爆禁止世界大会が広島市で開催され、「ヒロシマ」は人々が国境や世代を越えて平和について考え、訴える場となっていきます。1970 年代に入ると、被爆者や市民も国連で核兵器廃絶を訴えるなど活動の幅を広げていきました。

国内外からの旅行客、修学旅行生、各国首脳等の来訪が年を追って増えるようになりました。原爆の被害について実地に知る機会となっており、平和記念都市としての重要な役割となっています。

平和祭と平和宣言

1947（昭和 22）年 7 月 31 日、市役所事務休停日条例が制定され、市役所をあげて 8 月 6 日を市の平和記念日として取り組むことになりました。

1947 年 8 月 6 日、連合国軍総司令部（GHQ）の占領下にありましたが、第 1 回平和祭が中島本町の慈仙寺鼻の平和広場（平和記念公園の原爆供養塔付近）で、広島市役所・広島商工会議所・広島観光協会（後の広島市観光協会）が設立した広島平和祭協会により挙行されました。

6-02　第 1 回平和祭　1947 年 8 月 6 日

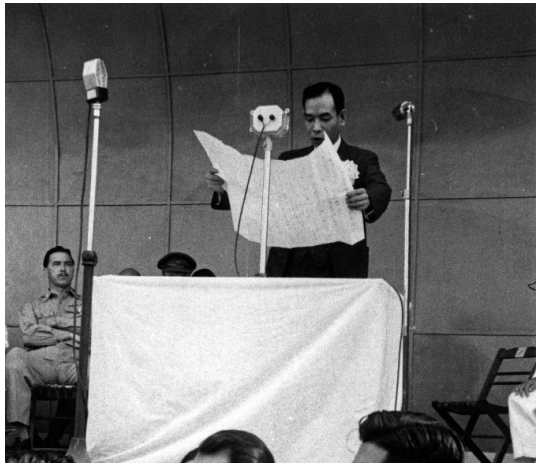
平和祭では、平和の歌（現「ひろしま平和の歌」）の演奏・合唱に続き、浜井市長が平和宣言を読み上げ、8 時 15 分にはこの年除幕された平和の鐘が打ち鳴らされました。

初めて行われた平和宣言で、浜井市長は広島市民の代表として、「この地上より戦争恐怖と罪悪とを抹殺して真実の平和を確立しよう。永遠に戦争を放棄して世界平和の理想を地上に建設しよう。」と、世界平和の実現を訴えました。

6-03　「平和の歌」合唱　1947 年 8 月 6 日

式典には、森戸辰男文部大臣、楠瀬常猪広島県知事らが出席し、ダクラス・マッカーサー連合軍総司令官、英連邦軍総司令官、米広島軍政部長、片山哲内閣総理大臣、衆参両議院の議長らのメッセージが寄せられ読み上げられました。

式典の模様はNHK広島中央放送局で実況放送され、米国にも中継されました。

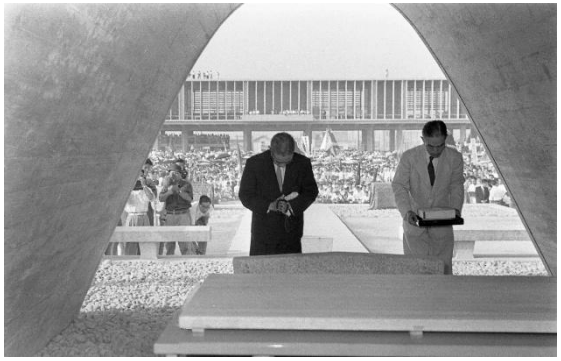


6-04　第1回平和祭で平和宣言を読む浜井市長
1947年8月6日

1950年の平和祭は、朝鮮戦争勃発により開催直前に、占領軍の意向を受けて中止されました。おりから、計画されていた平和擁護運動を共産党主導の「反占領軍的」「反日本的」なものと断じ、これに乗じられることを警戒したものでした。翌1951年の式典は、慈仙寺鼻の供養塔前広場で開かれましたが、市長の平和宣言はなく「あいさつ」にとどまり、米軍岩国基地所属の飛行機から花輪が投下され、霊前に供えられました。

連合国軍総司令部（GHQ）による占領統治が終了し、日本が主権を回復した1952年、平和祭は「原爆死没者慰霊ならびに平和記念式典」となり、この年完成した広島平和都市記念碑（原爆慰霊碑）前で挙行されました。式典では、原爆で親を失った子どもらが原爆慰霊碑を除幕し、原爆死没者名簿が奉納されました。平和宣言も復活し、浜井市長は、一人一人の良心が結びついていくことで世界平和が実現されるというメッセージを読み上げました。

平和記念式典は以来、名称を変えつつも毎年ほぼ同じ形式で行われましたが、平和宣言の内容は時代とともに変化していきました。当初は、原爆の禁止を訴える表現はありませんでしたが、核兵器の製造・使用禁止の国際協定（1958年）、核抑止論批判（1968年）、国連への期待（1972年）などが宣言に盛り込まれるようになりました。



6-05　平和記念式典で原爆死没者名簿を奉納する渡辺忠雄市長（左側）　1955年8月6日

6-06　原爆から10年後の平和記念式典。遺族をはじめ第1回原水爆禁止世界大会の参加者が参列し、3万を超す人々が犠牲者のめい福を祈ったといわれる。平和記念公園内にはバラックがまだ残っていた
1955年8月6日

被爆資料の収集・保存

・広島平和記念資料館

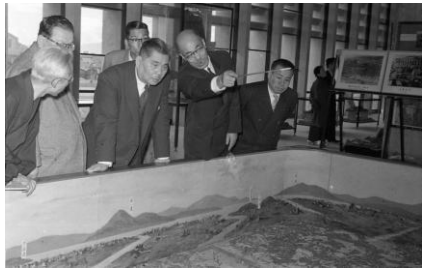
地質学者の長岡省吾は、調査先から戻り、8 日、壊滅した広島市内に入り、爆心地近くの基町で石灯籠の表面が溶融してできたとげに気づきます。岩石や磁器、変形した瓶などを集めて歩き、1948（昭和 23）年からは広島市の嘱託として原爆調査を続けました。

1949 年、原爆の威力と被爆の惨状を伝える資料を展示する「原爆参考資料陳列室」が基町の中央公民館の一室に設けられ、翌年、「原爆記念館」が公民館隣に完成し、被爆した瓦や石、コンクリート、植物などの資料が展示されました。

さらに 1955 年 8 月、平和記念公園内に広島平和記念資料館（原爆資料館）が開館し、長岡が初代館長に就きました。

6-07　基町の中央公民館に設けられた原爆参考資料陳列室　1949 年 9 月 25 日

6-08　中央公民館北隣に開設された原爆記念館　1953 年 2 月 26 日



6-09　来館者に説明する平和記念資料館の長岡初代館長　1955 年 10 月 27 日

長岡の活動に共鳴した人々は「原爆資料集成後援会」をつくり、被爆の惨禍をつづった手記などの文献を集め、市民に遺品の提供も呼びかけます。長岡は館長を退いた 1962 年、自身が集めた約 1,500 点を広島市に寄贈しました。1970 年代は市民が描く「原爆の絵」、80 年代は「広島原爆被災撮影者の会」のメンバーが撮っていた壊滅直後の記録写真が寄せられました。

「8 月 6 日」を伝える市民や遺族からの資料寄贈は今も続き、収蔵は約 2 万 2 千点（2025 年 8 月末現在）に及んでいます。

被爆資料は館内での展示をはじめ、国内外で開催される「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」で活用され、インターネットでも発信しています。被爆者の証言等と合わせて、世界中の人々に原爆被害の大きさ、悲惨さを伝えています。

6-10　資料館入口のパノラマ模型と見学者　1963 年 4 月

6-11　合掌するノーベル平和賞受賞者マザー・テレサ　1984 年 11 月 23 日

6-12　8 月 6 日被爆時の衣服などが展示されている本館展示室。2019 年にリニューアルを行った　2019 年 4 月

・草の根活動

原爆の惨禍を掘り起こす市民の活動もメディア報道と相まって広がりを見せました。

1966 年 8 月 3 日、「カメラリポート・爆心半径 500 メートル」が NHK 広島中央放送局から放送されました。原爆慰霊碑周辺の戸別地図復元を試みた 15 分の番組は反響を呼び、旧住民や広島大学原爆放射能医学研究所（現広島大学原爆放射線医科学研究所）が協力して、平和記念公園となった中島地区の「爆心復元」が始まります。1969 年には広島市が、翌年には国が原爆被災調査費を計上し、爆心地から半径 2 ㎞以内の実態調査へ広がりました。

また 1980 年代には、米軍が撮影し米国立公文書館が所蔵する記録映像 8 万 5 千フィートを、一口「10（テン）フィート」分（3,000 円）の募金で購入し、被爆者の証言を入れて再編集した映画「にんげんをかえせ」などの 3 部作が作られ、市民が主体の反核運動を押し広げました。

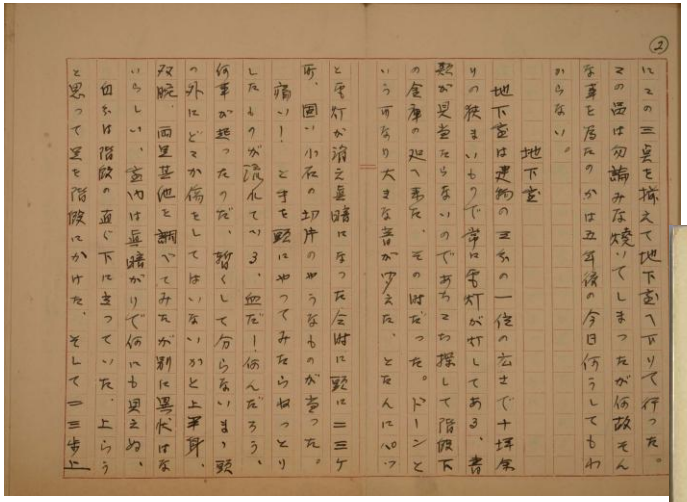
広島の高校生は、元安川の川床に埋もれている原爆瓦（原爆の熱線で溶けて表面が泡状になった瓦）を発掘する活動を始めました。この活動は次第に小中学生や県外の高校生にも広がり、原爆瓦モニュメントを建立する活動に発展しました。「瓦を守れ、瓦よ語れ！」という呼びかけに応じて全国から募金が寄せられ、1982 年 8 月、元安川の左岸（東岸）に「原爆犠牲ヒロシマの碑」が建てられました。

被爆体験の継承

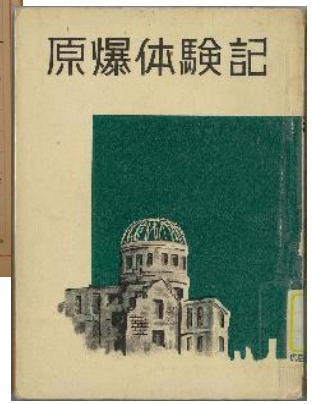
・被爆体験記・手記の収集・保存

原爆を体験した人たちの手記は、学徒動員先で被爆し亡くなった旧友らを悼み、広島一中（現国泰寺高校）の生徒らがガリ版刷りで 1946（昭和 21）年 8 月に作った「泉　みたまの前に捧ぐる」に始まります。

広島市は 1950 年 5 月、市民に初めて手記を募ります。被爆時に児童・生徒だった 84 人、大学生を含む一般 81 人から 165 編が寄せられ、広島市社会教育課は 18 編を収めた『原爆体験記』（134 ページ）を編みましたが、日本が米軍の出撃地ともなった朝鮮戦争の勃発で配布は限られました。子ども 2 人を失った男性の未掲載手記には「産業奨励館（原爆ドーム）が一ツ記念に残されるだけでは駄目である」と、復興が最優先の時期に早くも被爆建造物を保存して原爆の惨禍を世界に伝えることを求めるものもありました。



6-13　爆心地から約 170m の燃料会館（現平和記念公園レストハウス）で被爆し、唯一助かった男性の手記　1950 年



6-14　1950 年に発行された『原爆体験記』

被爆者や遺族らによる体験記の発行は、1952 年のサンフランシスコ平和条約（対日講和条約）発効後には年ごとに急増しました。「原爆の風化」が言われ始めた 1970 年代、被爆時の所属組織や、居住する自治体、全国各地の原爆被害者団体が担い手として盛んになり、被爆 50 年には年間最多の 300 冊を数えます。被爆者の高齢化とともに 2010 年代になると数は少なくなりましたが、子や孫、市民による聞き書きで続いています。これら体験記は、広島平和記念資料館や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館等で収集・保存され、施設内や Web で公開されています。

6-15　国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の体験記閲覧室

・被爆体験の証言と伝承

1969 年 4 月、平和記念資料館の職員が、修学旅行生に自身の被爆体験を語る講話を始めました。この講話はその後広島平和文化センターが登録した被爆者により行われるようになりました。山陽新幹線が広島へ開通した 1975 年、東京都の公立中学校で初の「広島修学旅行」が実施され、全国からの修学旅行生が増大していきました。地元の被爆者団体にとどまらず、個人で活動する被爆者や平和教育に取り組む被爆教員からも自らの体験を証言する動きが広がり、証言者は「語り部」とも呼ばれました。

6-16　被爆者による証言　2024 年

平和文化センターでは、1986 年 5 月から、被爆者証言ビデオの撮影を開始しました。作成された証言ビデオや原爆記録映画は、平和記念資料館内等で上映・視聴され、原子爆弾の悲惨さを伝えています。

被爆者の高齢化が進み被爆者から直接被爆体験を聞くのが難しくなるなか、2012（平成 24）年からは、被爆者の体験や平和への思いを受け継ぎ、これらを語り継ぐ「被爆体験伝承者」の養成を開始しました。2015 年からは伝承者による講話活動も始まっています。

6-17　被爆体験伝承者による講話　2024 年

・被爆建造物・被爆樹木の保存

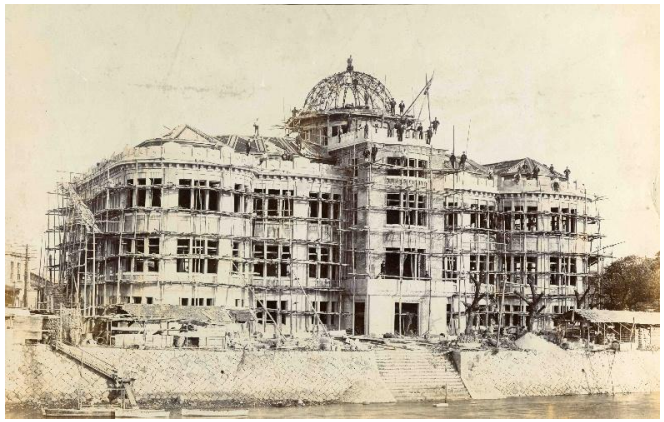
原爆は人体だけでなく、建造物や樹木にも大きな爪痕を残しました。広島市は、被爆後も残った被爆建造物や被爆樹木についても調査し、保存に努めています。最近では、南区にある最大級の被爆建造物「旧広島陸軍被服支廠」が 2024（令和 6）年、国重要文化財に指定され、県と国は全 4 棟の保存を決定しました。

6-18　旧広島陸軍被服支廠

原爆ドームの保存

・開館

被爆の惨状を今に伝える原爆ドームは、チェコの建築家のヤン・レツルの設計により、1915（大正 4）年 4 月 5 日、県内の産業奨励のための施設「広島県物産陳列館」として完成しました。その後、「広島県立商品陳列所」(1921 年)、「広島県産業奨励館」（1933 年）と名称を変えつつも、県内産品の陳列、商工業に関する調査及び相談等の業務を行いました。また、広島県美術展覧会や 1929（昭和 4）年に開催された「昭和産業博覧会」などの会場に使われ、美術館・博物館の機能も担いました。



6-19　建設中の広島県物産陳列館　1914 年

6-20　第 4 回全国菓子飴大品評会会場となった広島県立商品陳列所内部　1921 年

6-21　朝光会の油絵展開催を告げる垂れ幕　1930 年代

構造は一部鉄骨を使用したレンガ造で、石材とモルタルで外装が施されていました。全体は 3 階建てで中央部分が 5 階建ての階段室となっており、その上に銅板の楕円形のドームが載せられていました。当時広島にはこうしたヨーロッパ風のデザインによる建物は非常に珍しく、川面に映える姿の美しさとあいまって、広島名所の一つに数えられました。

戦況の悪化から産業奨励館は 1944 年 3 月、館業務が廃止され、内務省中国四国土木出張所や広島県地方木材などの統制会社が入りました。

6-22　1930 年頃の広島県立商品陳列所

・被爆

1945 年 8 月 6 日、原子爆弾は産業奨励館から南東約 160m の高度約 600m でさく裂しました。建物内にいた人は全員が即死したとみられ、全焼した建物の壁の一部と円蓋の鉄枠だけが残りました。米軍機関紙「パシフィック・スターズ・アンド・ストライプス」は 1946 年 8 月 6 日付で「原爆はドーム状ビルディング」の上空で爆発したと写真を載せ、占領軍向けの冊子「広島観光」は「〝ドーム〟ビルディング」と記載。サンフランシスコ平和条約が結ばれる 1951 年、地元紙や全国紙が掲載写真に「原爆ドーム」の説明を付け、広島市も 1953 年版の「市勢要覧」に収めた観光地図に「原爆ドーム」を採り、その呼称が定着していきました。

6-23　原爆で大破、全焼した広島県産業奨励館　1945 年 9 月

・保存への歩み

戦後の 1948 年、広島観光協会が旧産業奨励館の存廃の世論調査をすると「存置」が 436 通、「否存置」が 168 通を数えました。残すべきだ、悲惨な記憶を思い出させるとの意見が市民の間でも交錯し、復興を指揮した浜井市長は「金をかけてまで残すべきではない」と当初は否定的でした。

1960 年 8 月、被爆者の救援活動に取り組む河本一郎と彼を慕う児童・生徒らでつくる「広島折鶴の会」が、平和記念公園で「原爆ドームを守りましょう」と看板を立て、ガリ版刷りのビラを配ります。ビラはこの年 4 月に白血病のため 16 歳で亡くなった楮山ヒロ子の日記を紹介していました。「あの痛々しい原爆ドームだけが、いつまでも、恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろう」（1959 年 8 月 6 日付）。

市井の小さなグループが声を上げて粘り強く訴えた保存運動は、やがて市民の共感を呼び、地元の 11 平和団体が永久保存を浜井市長に要請します。1965 年、市は原爆ドームの強度調査を開始し、湯川秀樹博士ら有識者も連名で保存を要望します。広島市議会は翌 1966 年 7 月 11 日、原爆ドームの保存を満場一致で決議。浜井市長は保存の意思を表明し、工事費を国内外からの募金によって賄う方針を示します。市長自ら八丁堀の街頭や東京・数寄屋橋交差点で募金を呼びかけました。

募金の参加者は 130 万人を越え、寄せられた浄財は目標を上回る 6,619 万 7,816 円に上ります。保存工事は 1967 年 8 月 5 日に完工しました。

6-24　原爆ドーム保存街頭募金　1967 年

6-25　工事中の原爆ドーム　1967 年

原爆ドームの保存工事はその後 4 回行われています。平成元（1989）年度の第 2 回工事でも工事費に充てるため募金運動が行われ、多額の寄付金が寄せられました。

6-26　保存工事前　1967 年

6-27　保存工事後　1967 年

・ユネスコ世界遺産へ

日本が世界遺産条約を批准する 3 か月前の 1992 年 6 月、加盟案が国会で承認された後、平岡敬市長は市議会で「原爆ドームを世界遺産に」という考えを明らかにしました。市議会も 9 月に「原爆ドームを世界遺産リストに登録することを求める意見書」を採択、地域団体の取り組みや市民の国会請願運動などの働きもあって、4 年後の 1996 年、原爆ドームはユネスコの世界遺産に登録されました。

被爆から 80 年を迎えた 2025（令和 7）年 9 月 18 日、原爆ドームは、被爆当時の姿をよく保ち、人類史上初めて投下された原爆の惨禍を示す象徴的な存在であるとして、明治期以降の史跡としては初めて、学術上の価値が特に高い国の特別史跡に指定されました。

原爆ドームは国内外から訪れる多くの人々に、被爆の惨状と世界恒久平和の確立を今も伝えています。

核兵器廃絶への取り組み

1954（昭和 29）年 3 月 1 日、米国が中部太平洋マーシャル諸島ビキニ環礁で行った水爆実験で、東方約160㎞付近を航海中のマグロ漁船第五福竜丸の乗組員 23 人は放射性降下物である「死の灰」を浴びます。13 日後に静岡県焼津港に帰港した乗組員の被曝が分かると、原爆・水爆の禁止を求める声が全国で一気に高まります。原水爆禁止の署名は 2,200 万人を突破しました。

6-28　ビキニ水爆被災事件を受けてメーデーで掲げられた原爆マグロのはりぼて　1954 年 5 月 1 日

翌 1955 年 8 月 6 日、初の原水爆禁止世界大会が、平和記念公園に完成した広島市公会堂で開かれます。鳩山一郎首相が祝辞を寄せ、広島・長崎の被爆者、「死の灰」で亡くなった第五福竜丸無線長の妻が訴えました。

この大会を通じて、被爆者の存在と窮状が広く知られ、自ら声を上げた被爆者たちは翌 1956 年 8 月 10 日、長崎市であった第 2 回世界大会に集い、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）を結成します。事務局は広島市内に置かれました。

6-29　開館したばかりの広島市公会堂で開催された第 1 回原水爆禁止世界大会　1955 年 8 月 6 日

・座り込みと抗議電報

抗議の座り込み

1957 年 3 月 25 日、英国が中部太平洋のクリスマス島で予定していた水爆実験の中止を求め、被爆者ら 4 人が原爆慰霊碑の前で死没者とともに抗議する意思を込めた座り込みを始めました。市民も参加するようになり、1973 年以降は、いかなる国の実施にも碑前で座り込む行動が今日まで続いています。被爆者運動の精神的な支柱だった森滝市郎の座り込みは 1990（平成 2）年には 500 回を数えました。

6-30　フランスの核実験に抗議し、原爆慰霊碑前に座り込む森滝市郎　1973 年 7 月 20 日

6-31　座り込みに参加した山田市長　1973 年 8 月 27 日

抗議電報

1968 年 8 月、フランスが南太平洋のファンガタウファ環礁で初めて水爆実験を行うと、山田節男市長、浅尾義光市議会議長は連名でシャルル・ド・ゴール仏大統領に抗議の電報を送りました。以後、広島市は核実験の報道があると在日大使館や本国の元首に宛てて電報や書簡で核実験への抗議を行っています。

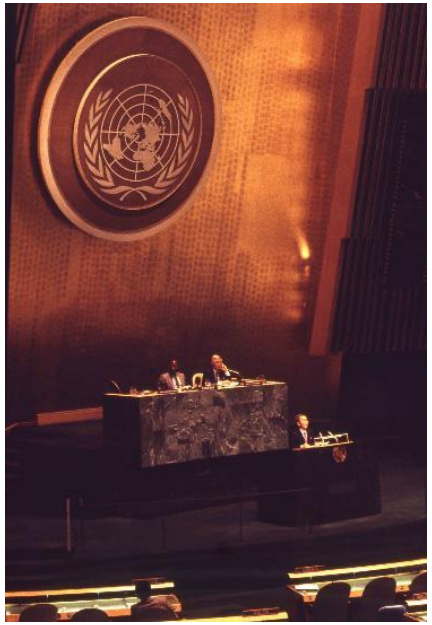
・国連（国際連合）への働きかけ

1970 年代に入ると、冷戦下の核軍備の拡大を背景に、核軍縮に対する関心が国際的にも急速に高まりました。また、1970 年代末から 80 年代初頭にかけては、北大西洋条約機構（NATO）諸国において、ソ連の核配備に対抗するため中距離核ミサイルの配備が拡大され、欧州で核戦争への緊張感が高まりました。

こうした国際情勢のなか、日本の原水爆禁止団体や広島市・長崎市は、1974 年から 1978 年にかけ、国連に対して、核兵器の使用禁止・廃絶、全面軍縮等を求める働きかけを行いました。

1978 年 5 月、ニューヨークの国連本部で初めて「国連軍縮特別総会（SSD）」が開催され、園田直外務大臣と荒木武広島市長・諸谷義武長崎市長が列席しました。会議開催中の 5 月 23 日から 6 月 23 日まで、広島・長崎の被爆の惨状を伝えるため、国連本部ビル内では初の原爆展となる「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」が開催されました。

1982 年に開催された第 2 回総会（SSDⅡ）では、広島平和文化センター会長として荒木市長が演説し、被爆の実相を述べ、核兵器の不使用を訴えました。これは、国際的な核軍縮の議論の場に被爆者の声を届ける象徴的な出来事となりました。



6-32　SSDⅡで演説する荒木市長（右下）
1982 年 6 月 24 日

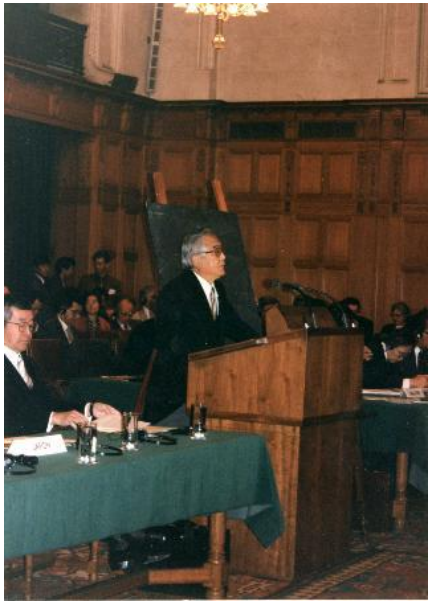
・世界平和連帯都市市長会議の開催

1982 年の SSDⅡでの荒木市長の呼びかけをきっかけに、核兵器廃絶のため、世界の都市が国境を越えて連帯して活動する機構として、世界平和連帯都市市長会議（現在の平和首長会議）が設立され、1985 年、広島・長崎両市において第 1 回総会が開催されました。会議には、海外 22 か国から 67 自治体、国内 33 自治体の代表が参加しました。以来 4 年に一度広島・長崎両市で総会が開催されています。同会議には 2025（令和 7）年 9 月 1 日現在、166 か国・地域 8,516 都市が参加しています。広島市は会長都市として、「持続可能な世界に向けた平和的な変革のためのビジョン」の下、「核兵器のない世界の実現」、「安全で活力のある都市の実現」、「平和文化の振興」を目標に掲げ、世界中の加盟都市と共に、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を目指す活動を続けています。

・国際司法裁判所（ICJ）での意見陳述

1995（平成 7）年 7 月、オランダ・ハーグの国際司法裁判所で、核兵器の威嚇または使用が国際法に違反するかどうかの審理が開始されました。11 月、広島・長崎の両市長が証人として出廷し、平岡広島市長は、被爆の惨状や、民間人（他国の人々を含む）を無差別に殺傷する非人道性と長期にわたる放射線障害を与えること等を例示し、核兵器の威嚇または使用は国際法に反することは明らかであるとし、さらに、核兵器の開発・保有・実験も国際法に違反するという意見を陳述しました。

1996 年 7 月 8 日出された ICJ の勧告的意見では、国家存続に関わる極限状態での使用については保留したものの、「核兵器の威嚇または使用は一般的に国際法、とりわけ人道法の原則及び規則に反する」との判断が示されました。

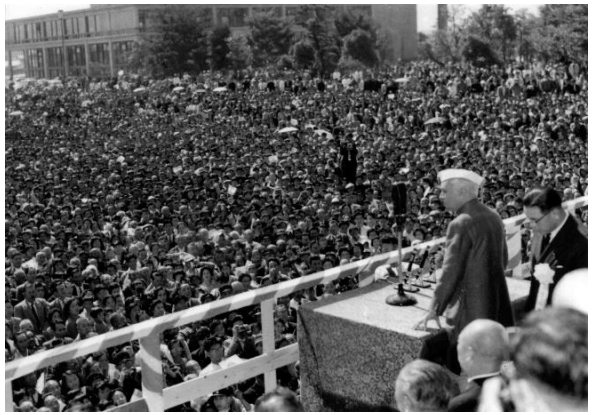


6-33　ICJ で核兵器の違法性を訴える意見陳述を行う平岡市長　1995 年 11 月 7 日

元首や著名人等の広島訪問

広島には、戦後の早い時期から、多くの元首や海外の著名人が訪れています。

1948（昭和 23）年にはヘレン・ケラーが訪れました。1957 年にはインド首相ジャワーハルラール・ネールが、自らの強い希望で広島を訪問しました。広島が海外の国家元首を迎えるのは初めてのことであり、平和記念公園で開催された市民歓迎大会には、3 万人が参加しました。



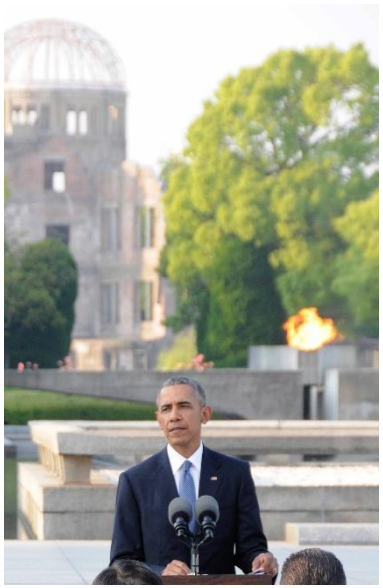
6-34　集まった市民に語りかけるインドのネール首相
1957 年 10 月 9 日

これまでに、キューバのチェ・ゲバラ（1959 年）、ローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世（1981 年）、ノーベル平和賞受賞者マザー・テレサ（1984 年）、元ソ連大統領のゴルバチョフ（1992（平成 4）年）等が広島を訪れました。最近では、2016 年 5 月にオバマ米国大統領が、2019（令和元）年 11 月にローマ教皇フランシスコが広島市を訪れ、原爆犠牲者に祈りを捧げ、被爆資料を見て、被爆の実相に触れました。

6-35　原爆慰霊碑前で祈りをささげるローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世　1981 年 2 月 24 日

なかでもオバマ大統領の広島訪問は、原爆投下国の米国現職大統領としては初めてのことであり、内外の注目を集めました。オバマ大統領は、原爆慰霊碑に献花した後、「私たちが選ぶことのできる未来では、広島と長崎は核戦争の夜明けとしてではなく、倫理的な目覚めの始まりとして知られるだろう」と演説しました。

広島市では被爆の実相に触れてもらい、核兵器のない世界の実現につなげるため、海外の要人の被爆地訪問を求める活動や国際会議の誘致も行っています。2023 年 5 月には、広島で G7 サミット（主要国首脳会議）が開催されました。被爆地での開催は初めてのこととあって、出席した各国首脳や招待国首長等は原爆慰霊碑に献花し、平和記念資料館を視察しました。



6-36　平和記念公園の原爆慰霊碑前で演説をするオバマ大統領　2016 年 5 月 19 日

6-37　献花する G7 サミット（首脳会議）の出席者　2023 年 5 月 19 日